

## 発達障害のある学生への合理的配慮と心理検査

信州大学教育学部 教授

高橋知音 (たかはし ともね)



### Profile — 高橋知音

1992年、筑波大学大学院教育研究科修了。99年 University of Georgia, Graduate School of Education 修了(Ph.D.)。信州大学講師、助教授(准教授)を経て、2010年より現職。専門は教育心理学、臨床心理学。主な著書は『発達障害のある大学生のキャンパスライフサポートブック』(単著、学研教育出版)、『ADHD コーチング』(監訳、明石出版)など。

1990年代後半から2000年代前半にかけて、筆者は米国の大学における発達障害学生のための支援センターをいくつか視察する機会があり、「合理的配慮」の考え方を基本とした、障害学生支援の考え方にふれることができた(高橋・篠田, 2008)。その考え方は、学生ができないことをいかにしてできるように訓練するかというのではなく、機能障害が学習の妨げとならないよう配慮(環境調整)したり支援技術の利用を指導したりするというものであった。

合理的配慮における「合理的」には二つの意味がある。一つは支援者にとって過度の負担にならないということであり、もう一つは直面している困難と認知機能障害との関連について根拠が示されているということである。配慮の内容は、その認知機能の特徴に合わせて決められる。たとえば、拡大問題冊子を準備するという決定は、学習障害の診断があるからという理由ではなく、視機能の弱さから細かい文字の認識に時間がかかるという「根拠」が示されることでなされる。

国内でも障害学生支援が充実してきて、合理的配慮の考え方も浸透しつつあるが、検査結果などの「根拠」に基づいて支援の内容を決めるといった実践はあまり広がっていないと感じている。その一つ

の理由は、大学生を対象にした検査自体が限られているということもあるだろう。そこで本稿では実際に利用可能な検査を紹介しながら、発達障害学生支援における心理検査活用の意義について論じたいと思う。

### 心理検査で認知機能の特徴を評価する

発達障害と関連する主な認知機能として、自閉症スペクトラム障害においては社会的情報の処理、注意欠陥多動性障害においては注意機能、学習障害においては言語情報の処理と出力、数的処理能力などが挙げられる。これらについて、どの程度の機能の弱さがみられるかの情報は、どこまで配慮をすべきか、どのような支援をすべきかを定めるうえで不可欠である。しかし、こうした認知機能の評価に関して、先述のとおり、大学生を対象にした検査は限られている。ここでは筆者が実際に学生支援に活用している検査を簡単に紹介する。

**WAIS-III (Wechsler Adult Intelligence Scale 3rd edition : 日本文化科学社)** 全般的な知的能力の指標である全検査IQに加え、「言語理解」「知覚統合」「作動記憶」「処理速度」の4領域の認知機能を群指数として評価できる。個別式の認知機能検査で重要なのは、指数として得られた値の高低

だけでなく、それぞれの下位検査にどのように取り組んだかについて、行動観察で得られる情報である。

たとえば、見本に従って数字とペアになった記号を決められた時間の中でいくつ書けるかという課題がある。そこで得点が低くなったときに、細かい記号を正確に書くこと自体に困難があったのか、一つひとつ丁寧に確認していたために点数が低くなったのか、速く書いていたものの雑でミスが多かったのかといった違いで解釈は異なる。一つめの例であれば不器用さの問題、二つめであれば正解へのこだわり、自信のなさ、几帳面さ、マイペースなどの特徴、三つめであれば不注意、せっかちといった特徴が考えられる。

これらの解釈は仮説として挙げられ、他の検査結果や行動観察、検査以外の場面での聞き取りで得られた情報と合わせて考えたときに裏付けが取れれば、解釈仮説として採択される。WAIS-IIIを発達障害のある大学生のアセスメントに用いた例については森光・高橋(2011)を参照してほしい。

**社会的情報処理に関する検査** 筆者らのグループは、社会的行動の背景にある認知機能を評価する検査を開発している。具体的には、①社会的サインを正しく読み取れているか、②社会的に適切な行動についての知識があるか、③その

知識を社会的文脈にあわせて適切に利用することができるか、といった内容が含まれる。「感情認知課題」(表)は①を評価する目的で開発された。音声で短い発話を聞き、発話者の表情を選択肢から選ぶという課題で、皮肉や冗談といった間接的発話についても正しく理解できるかどうかを調べることができる。「社会的行動の評価課題」(藤岡他, 2011)は、台本形式の短い物語を読んで文中の言動がその状況において適切かどうかを回答する課題である。回答の評価は、基準となっている大学生の回答と比較したときに、多数派と一致しているかどうかによって得点化される。この検査では「暗黙のルールを理解」の程度を調べることができる。詳細や活用例は高橋(2012)にまとめた。

**注意機能検査** ADHDは注意機能の障害であるため、診断がある場合や疑われる場合には、注意機能を評価するための検査を加えたい。具体的には、持続処理課題もしくは持続遂行課題などと訳される Continuous Performance Task (CPT)が挙げられる。CPTは、一定時間に特定の刺激にだけ反応し続けるなどの作業の様子から、注意機能を評価する検査である。

CPTはいくつかの種類が作られているが、筆者はIVA-CPT(視聴覚統合型・持続処理課題: BrainTrain社)を利用している。標準化データは日本人のものではないが、文化的言語的要素をほとんど含まな

い課題であるため、注意機能の傾向をとらえることは可能と考えられる。学生に実施し、結果について説明すると、日常生活にみられる不注意や反応抑制の問題と関連して納得する機会が多いとの印象がある。CPTの結果のみに基づいて注意機能を評価するには限界もあるが、特徴を把握することという点においては、有効な検査のひとつといえるだろう。

#### 心理検査を活用することの意義

最後に、発達障害のある学生支援において、心理検査の結果を利用することの意義をまとめたい。冒頭で「合理的」であるために「根拠」が必要であると述べたが、その意味について少し補足する。根拠に基づいた支援を行うことの第一の意義は、支援の効果が上がる可能性が高まるということである。発達障害では、同じ診断があっても背景にある認知機能の特徴が大きく異なっている場合が少なくない。つまり、診断名に依存した支援内容の決定は、的外れな支援になるリスクを抱えているということである。もちろん、検査をすれば必ず効果が上がるというわけではないが、少なくともその確率を高めることはできる。

次に、配慮における公平性の担保である。とりわけ試験など成績評価に関わる配慮においては、それが本当に他の学生と公平な条件と言えるのかについて、異論もでてくるだろう。そういった意見に対し、「視覚的情報をうまく統合

して把握することに関して100人に1人程度の割合でしかみられないほどの弱さがあるのです」といった具体的な数値を示すことは、配慮の内容を決定するにあたって、より多くの関係者に「合理的である」と納得してもらうための材料となるだろう。

心理検査を実施することが支援に役立つもう一つの側面は、学生の自己理解の促進である。大学生年代は十分な理解力があり、自分自身について知りたいという欲求も高い。客観的なデータとしての検査結果は、自分自身の特徴を理解するための手がかりとなる。ただし、検査結果を説明すればそれだけで自己理解が進むというものでもない。それを日常生活における失敗経験やうまくいった場面と結びつけることによって、はじめて理解が深まるのであり、状況を改善するための工夫につながっていく。進路選択においても自己理解は重要な前提条件であり、卒業後に社会でうまくやっていくためにも、学生時代に心理検査を通して自己理解を深める体験は意義のあるものだといえるだろう。

#### 文 献

藤岡徹・森光晃子・高橋知音(2011) 社会的行動の評価課題の作成: 暗黙のルールを理解する能力を測定する試み. 『LD研究』20, 304-316.  
 森光晃子・高橋知音(2011) 「事例7 大学生活において困難のあったアスペルガー障害のある女子学生」藤田和弘他(編)『日本版 WAIS-IIIの解釈事例と臨床研究』日本文化科学社  
 高橋知音(2012)『発達障害のある大学生のキャンパスライフサポートブック』学研教育出版  
 高橋知音・篠田晴男(2008) 米国の大学における発達障害のある学生への支援組織のあり方. 『LD研究』17, 384-390.

表 感情認知課題における3タイプの刺激

刺激タイプ	項目数	発話文	字義感情	感情的プロソディ	得点の解釈
一致	10	大変お世話になりました	感謝	感謝	基本的な感情概念の理解課題への取り組み態度
不一致	11	大変お世話になりました	感謝	怒り	皮肉・冗談の理解
無感情	13	隣の家には犬がいるよ	無感情	喜び	感情的プロソディの認知

3種類の刺激によって単純な感情の認識から、皮肉や冗談といった間接発話における発話者の意図の理解までを評価できる。